

井上先生を送る

タイトル(その他言語)	
著者	岡本 崇男
雑誌名	神戸外大論叢
巻	65
号	2
ページ	1-2
発行年	2015-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001710/



井上先生を送る

岡本 崇男

井上先生が本学ロシア学科の助手として赴任されたのは、1975年の4月のことだった。前年度末に桜木新吾先生が定年退職され、桜木先生と同じ明治生まれの久保二郎先生もこの年度をもって退職されることになっており、1950年以来のいわゆる「四教授時代」が終わりを告げるという世代交代の時期に井上先生は教師生活を始められたことになる。

井上先生は、院生時代から一貫して古プロシア語を中心にバルト諸語を研究された。助手当時の指導教官であった松川秀郎先生が「井上君はどうしてロシア語をテーマにした論文を書かんのだろうか」とこぼしておられたことがあるが、井上先生自身はバルト語研究とロシア語教育とをはっきりと区別されていたと思われる。モノグラフを執筆した年でも必ず論文は書いておられた。その分、昇任も早く、教授になられた時にはまだ41歳であった。先生の座右の銘の一つは古典語学者の田中秀央が自著の序文に必ず使っていた *Festina lente* だと思うのだが、綿密にコンスタントに仕事を続けていれば良い結果が得られるというこの金言を井上先生は自ら実践されたのであった。ところで、バルト語以外の言語についても先生は書かれていて、特に2010年に出た単著『古代スラヴ語ノート』（神戸外大研究叢書）は肩の力を抜いたエッセー風の語り口でありながら、学問的な要点を抑えた良書であり、ロシア語およびスラヴ語関係者の間で密かな人気を呼んだ。

教師としての井上先生に対する学生の印象は、どうやら時間の経過とともに変化している。着任当時、先生はまだ20代であったので、チューターとして付き合うこととなったその年のロシア学科新入生たちは先生に対して大いに親近感が湧いたらしかった。ところが、1980年を過ぎた頃から厳しい先生という印象を学生に与えるようになった。実際に、進級判定に際しては、仏心を出しがちな年配の先生たちに真っ向から異議を唱える鬼であったと聞いている。もっとも、向学心のある学生には極めて親切で、井上先生のゼミを選択するという勇気のある学生は、かなりの恩恵にあずかった筈である。90年代になると先生が作る教材が「親切」になったようである。本来、教材作成には手を抜かない人なのであったが、例えば以前ならロシア語の資料だったものが、これに加えて日本語の解説あるいは手引きのようなものも準備されるようになった。そし

て、ここ数年は優しい先生で通っていたようである。

井上先生が神戸外大の教員になられた年にわたしはロシア学科の3年生に進級したので、先生に教わる可能性が十分にあったのだが、何かの巡り合わせでそれは実現しなかった。その分、この大学に勤めるようになってからも気が楽であった。しかし、教わったことは沢山ある。なかでも古教会スラヴ語の勉強会に誘っていただいたことには心から感謝している。他大学でこの言語を13年間教えることができたのも、また中世ロシア語を勉強する気になったのも、先生が着任してすぐに始められた研究会に参加できたからなのである。

ところで、神戸外大は2007年にそれまでの神戸市の一部局という「安定した」地位を捨てて、公立大学法人となったのであるが、井上先生はこれと前後する2004年度から2009年度までの間、学生部長として2年間、研究所長として3年間、大学の執行部の主要なメンバーとして数々の難局に取り組んで来られた。全国的な大学改革の流れの中で、「何かをしなければならない」、「どうにかしなければならない」、「他大学に遅れを取ってはならない」という「ならない」尽くしのプレッシャーを感じながら、なにかにつけて心を砕かれたと想像する。この間に疲れた心身が癒されることを願って止まない。

数年後、神戸外大ロシア学科は井上先生が着任された当時と同じように、世代交代の時期に入る。その時、学科にどのような変化が起きるのかを優しい眼差しで見守って欲しい。